



## 私たちは人を幸せにするために生きている

ロシアによるウクライナへの侵攻が始まって、一年以上が経過し、ふた冬が過ぎました。その間、子どもを含め多くの人が命を失ったり、たくさんの方が大変な状況の中での生活を強いられられています。今のウクライナの状況がU N H C R（国連難民高等弁務官事務所）の広報誌に、記載されていたので紹介しましょう。



・・・戦闘で家を破壊された人、大切な家族や隣人を失った人、危険が迫るなか仕事も家も手放さざるをえず苦しい生活を強いられている人、いまだ終わりの見えない紛争の中で心身のバランスを失った人、逃れたくても金銭的な理由や身体的な理由から逃れることができない人、戦闘地域で身動きをとることができず食料や物資も不足し支援を待ち続ける人。地域や個々人の状況によってさまざまな困難を抱え、支援のニーズは多岐にわたります。最近はこうした難しい状況に加え、ウクライナ国内の主要なインフラが破壊され、厳しい寒さのなか電力供給が壊滅状態となり、何百万人もの人々が電気や暖房、安全な水を持続的に利用できない過酷な暮らしを強いられています。・・・

今、私たちが住む日本においても、エネルギーや食料品の高騰で生活が困難になっている人が多くなったり、人命が軽くみなされた事件が発生したりしており、空しくなるようなニュースが多く聞かれ、この世の中が嫌に感じることもあります。でも、戦争状態であるウクライナの人々の状況は、はるかに過酷です。

先月号でも紹介した寂聴さんの言葉（「寂聴 九十七歳の遺言」瀬戸内寂聴 朝日新書）に次のようなものがありました。

“今の世の中が結構だなんて思っていたら、それはおバカさんでしょう。全く結構じゃないわね。たとえば、世界中に難民がいます。日本にも災害などで難民のようになっている人たちがいます。自分が幸せでも、そうじゃない人がたくさんいるのです。ほんとに嫌な世の中ですが、**自分以外の誰かを幸せにするためにこの世の中に生きているんだと考えましょう。**そうすれば、自分以外の誰かが幸せになるように、自分のできる範囲で何か手伝えるはずです。よその国で戦争が起こって、家が焼かれて、子どもが殺される。「そんなの他人事、私には関係ないわ」じゃダメなんです。自分が家で暖かくしていても、家をなくして寒さが身に染みている人はどんなだろうと同情して欲しい。心で思うだけでもそれは通じます。「私には何もできないけれど可哀そうだな」と思うだけでも、相手に通じる。そういうことを考えてみてください。”

この言葉で、周りに困っている人がいたときにはどんな思いをもてばいいのか、どう行動すべきなのかを寂聴さんは教えてくれます。私たちは、困っている人に寄り添い、自分にできることは何かを考え、手を差し伸べることができる人間になりたいものです。そのような姿を子どもたちに見せることで**私たちは人を幸せにするために生きている**ことを教えることができるのです。